

3 イギリス

 ロンドンまでの足跡

漱石がヨーロッパの地に初めて足跡を残したのは、一九〇〇年（明治三三）十月十八日、イタリアのナポリの一時上陸の時であった。半日の上陸見物で、漱石は博物館でポンペイの出土品などを見ている。日記の「道路ハ皆石ヲ以テ敷キツメタリ此地ハ西洋ニ来テ始メテ上陸セル地故夫程驚キタリ」という記述は、確かに実感であつたろう。

翌十九日に船はジェノヴァに着き、同行の留学生、漱石・芳賀矢一・藤代禎輔^{すけ}らはここで上陸、正式にヨーロッパの土を踏むことになった。難儀をしながら列車でパリに着いたのは二十一日朝で、二十八日にパリを出発するまで、会期が延長されたパリ万博を見物する。皆でエッフェル塔の最上階に登った時、芳賀矢一は、塔上から鋼子^こ夫人に絵はがきを書き、「真に宇内^{うない}の壯観なり」と記した（『芳賀矢一文集』）。このパリの一週間を跡付けた本も刊行された。大都会に驚いている様は、二十三日付の鏡子夫人宛の手紙に詳しい。「是ヨリハ



パリ万博会場 右奥にエッフェル塔が見える

＊山本順二『漱石のパリ日記』（二〇一三・一二、彩流社）

一人ニテ英京ニ渡ル事故ドウナルカ妙ナモノニ候」という一節もある。

ロンドンの足跡*

一九〇〇年（明治三三）十月二十八日夜に一人ロンドンに着いた漱石は、前に留学していたことのある大塚保治に教えられた宿、ガワー・ストリート（Gower Street）の一室に落ち着いた。ロンドン大学や大英博物館にも近い場所、建物は今でも残っており、特定出来る。建物の前は、交通量の多い道路ではないが、少し行けばもう繁華街の趣だ。漱石は早速翌二十九日に市街を歩き始めるが、折からのボーア戦争から帰った兵士の歓迎行事の喧騒に巻き込まれる。固有名詞は全くないが、『永日小品』の一篇「印象」にその体験が描かれる。人の波に巻き込まれ、トラファルガー広場まで歩いたロンドンの最初の体験は、文字通り印象的だ。漱石は、おそらく既にロンドンのガイドブックである赤い表紙のベデカ Baedeker を持っていたろう（漱石蔵書にある）。* 折り込みの地図も付いた書物だが、それを見てもすぐさまこの大都会を歩くわけにはいかない。今なら、例えば、スマートフォンで地図アプリを使ったり、AN-LONDON のような地図と地名索引が一体化した書物を携えて歩くにしても、

*ロンドンの足跡をたねんに追った業績は多いが、先駆的な三冊として角野喜六『漱石のロンドン』（一九八二・五、荒竹出版）、稲垣瑞穂『漱石とイギリスの旅』（一九八七・五、吾妻書房）、塚本利明『漱石と英国』（一九八七・九、彩流社）を挙げておく。

*漱石の持っていたロンドン案内の『ベデカ』は、一九八九年版。



トラファルガー広場までは、結構面倒な道のりだ。日記に、「方角モ何モ分らず」という記述もある。

この日から十二月初めまでの生活の一端は残された日記でうかがわれるが、ユニヴァーシティ・カレッジのケア教授 Ker の講義を一時聴講し、ケンブリッジに行きそこの滞在の可能性をアンドリューズ氏 Andrews に訪ね（結局は実現せず）、シェイクスピア学者のクレイグ Craig の個人教授を受ける段取りを付けている。その間、漱石がロンドンの名所を訪れたのは言うまでもない。日記の記述からわかる場所を記しておきたい。

ロンドン塔・タワーブリッジ・ロンドンブリッジ・大火記念塔（一〇・

三〇）、大英博物館・ウエストミンスター寺院（一一・三）、ナショナルギヤラリー（一一・五）、ハイドパーク（一一・六）、ケンジントンミュージアム・ヴィクトリアアルバート博物館（一一・一一）、セントポール寺院（一一・一七）

その間、二番目の下宿プライオリ・ロード 85 Priory Road, West Hampstead に、十一月十二日に移っている。現在、地下鉄ジュビリー線で、ロンドンの中心地からやや離れた北西の方向のベーカリー駅 Bakerloo で降り、十



プライオリ・ロードの下宿

ロンドン

